

Child 子どもを守る Saving

16 高橋恭子さんと
加藤達夫さんの対談



加藤達夫
(かとう・たつお)
日本教職員組合中央執行委員・広報部長、教育文化部長。1991年から三重県内の公立小学校教諭として勤める。2008年から三重県教職員組合執行委員、2012年4月より現職。

高橋 これまでは、メディアを読み解くことが重視されてきましたが、近年では「クリティカルからクリエイティブへ」という方向が示されています。もともと「読み解き」と「創造」の両輪があつてこそそのメディア・リテラシー教育は、いわば現代の「読み書き」なのです。一部の教職員の方の意欲と情熱だけで進めるには相当な無理があります。

加藤 たしかにメディア・リテラシ



これからの時代に求められる 「メディア・リテラシー」教育

「子どもを守る」シリーズ 16

デジタルネイティブと呼ばれ、携帯を使って容易にメディアにアクセスできる子どもたち。こうした環境下で、ますます必要性が増す「メディア・リテラシー」教育(※)とは？ 実践的な方法で普及活動を行ってきた早稲田大学教授の高橋恭子さんと教育現場の実態に詳しい日本教職員組合の加藤達夫さんにお話いただきました。

**シンポジウム
「メディア社会とはじめ」
早稲田大学・大隈講堂で**

早稲田大学メディア文化研究所公共ネットワーク研究会は、11月19日(火)午後5時30分から大学生たちの運営による「メディア社会とはじめ」を開催します。多様なメディアの発達によって、複雑な様相を呈している「はじめ」。その実態は？ 対応策は？ メディア社会におけるはじめの問題を教育現場やメディアに詳しいパネリストたちと共に考えます。

【登壇者】
●基調講演
保坂展人さん(世田谷区長)
●パネルディスカッション
早川信夫さん(NHK解説委員)
高橋恭子さん(早稲田大教授)
朝比奈なをさん(進路アドバイザー)
桜井智恵子さん(大阪大谷大教授)

【問い合わせ先】
「メディア社会とはじめ」
シンポジウム実行委員会
03-5645-2834
http://shakai-ouen.com/kyouiku-talk/

加藤 スマートフォンが普及し、子どもたちのインターネット利用時間も増えています。その中で、子どもたちが受けている影響は、大人にとっても必要ない。生涯教育として位置付け、それぞれの地域での取り組みを広げていければと思います。

高橋 スマートフォンが普及し、子どもたちのインターネット利用時間も増えています。その中で、子どもたちが受けている影響は、大人にとっても必要ない。生涯教育として位置付け、それぞれの地域での取り組みを広げていければと思います。

地域やメディアの協力も得て「教室を超えた」対話づくりへ

高橋 メディア・リテラシー研究の第一人者である英国のバッキンガム氏は、「生まれてすぐにメディアに接し、小学校入学前にすでに影響を受けている現代の子どもたちに学校が行うべきは、まず、その影響を緩和すること」と言います。そのためには、教職員が子どもの目線になって、たとえば、一緒にアニメや子ども番組を見て、対話をするところからはじめられるのもよいと思います。それが、これからのキーワードとなる「コミュニケーションを創り出す」ことにつながります。

教育現場でメディアの影響やリテラシーの必要性を感じることは？

加藤 子どもたちに影響が大きいのはテレビです。大人社会でも、テレビ番組が「ダイエツトに〇〇が効く」と報じれば、翌日にはその商品がスーパーの棚からなくなるほどです。子どもたちは、よりストリートにテレビコマercialなどに反応します。

低学年の担任をしていた時のことです。子どもたちがこぞつて、ある人気アニメの主人公の言葉遣いを真似る時期があつて、その時、多くの保護者から、「やめさせてほしい」という声があがりました。一方でアニメの物語全体を通して見ると、家族の大切さなどを伝える温かいメッセージがあり、保護者自身がそのアニメのファンだったりするので、とても困った記憶があります。

大人は、悪影響を心配してシャットアウトしがちですが、問題なのは、子どもたちが送り手側の意図やメッセージ、物事の本質を理解できず情報や表現を鵜呑みにしてしまう点だと気づき、リテラシーの必要性を実感しました。

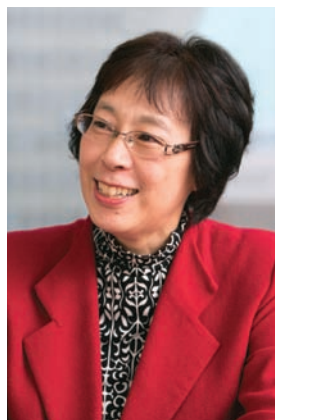
高橋 まさに、メディア・リテラシー教育はそういった背景から始まったのだと思います。

カナダのオンタリオ州では、世界で初めてメディアの情報を「クリティカル(批判的)」に読み解くメディア・リテラシー教育を公教育に取り入れました。その背景には、衛星を通じて

放送される米国の大衆文化に対する懸念があつたともいわれています。

カナダには、メディア・リテラシー教育を行う上で、優れた教材が多いのですが、その最たるものが、BBC放送が1957年のエープルフルールにニューヨークで流した映像です。木にスパゲティが実っている農場の場面から始まり、「一本一本摘み取られ、「収穫を祝つて乾杯」というナレーションとともに、おいしそうに人が口に運ぶまでをプロの俳優が演じ、まるでドキュメンタリーに見えるのです。あまりにもよくできていたので、映像を見た小学生の約80%がそのまま信じてしまったのだそうです。

加藤 今年、日本PTA全国協議会が発表した調査報告でも、テレビが子どもに与える影響が「良い」や「非常に良い」と答えた保護者が前年度の79%から48%と大幅に下がり、評



高橋恭子
(たかはし・きょうこ)
早稲田大学政治経済学術院教授。同川口芸術学校校長。ビジネスウィーク東京支局勤務、映像ジャーナリスト、慶應義塾大学特別招聘教授を経て、現職。ゼミの学生と小学生が共同製作した映像プロジェクトでも話題に。

が増えています。(グラフ2) SNSやネット中毒などの危険性が指摘される中、対処に戸惑う保護者も少なくありません。その状況を把握し、理解した上での対応が必要ですが、それは学校だけでは難しい。保護者に対する啓発活動もしながら、学校、家庭、地域が連携していくことが大事だと思っています。

高橋 バッキンガム氏も、地域やメディアのサポートが必須だと訴え、「教室を超えたメディア・リテラシー」を唱えています。イギリス、デンマークでは映画協会、韓国では市民団体、アメリカではケーブルテレビなど、海外には、地域ぐるみで推進している事例がたくさんあります。

加藤 そもそも、「メディア・リテラシー」は子どもだけでなく、大人にとっても必要な力。生涯教育として位置付け、それぞれの地域での取り組みを広げていければと思います。

司会・構成
「子ども応援便り」編集長 高比良美穂

「メディア・リテラシー」は子どもだけでなく、大人にとっても必要な力。生涯教育として位置付け、それぞれの地域での取り組みを広げていければと思います。

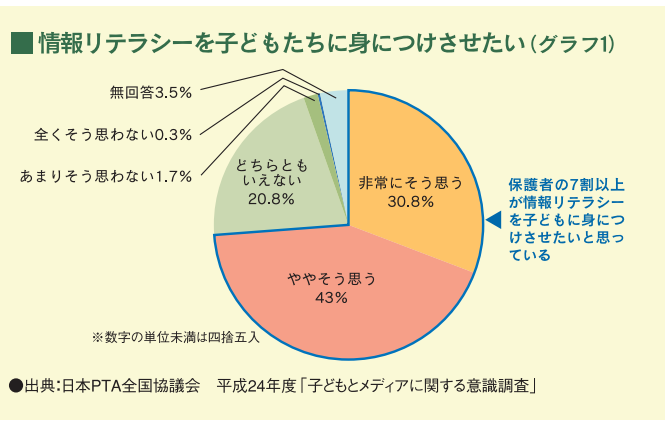
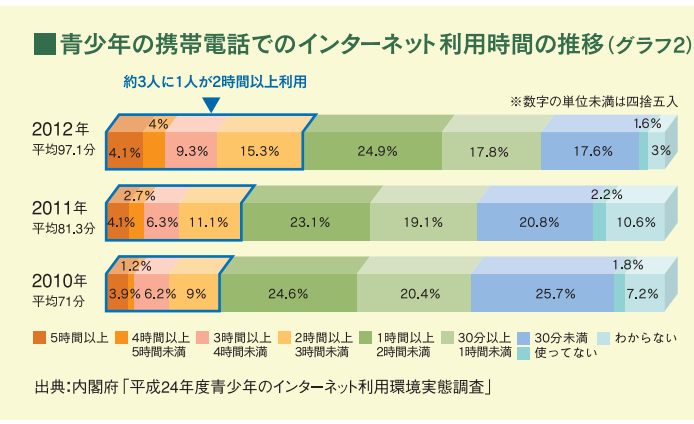
「メディア・リテラシー」は現代の「読み書き」です！

加藤 必要性は感じていても、具体的にどう授業の中に位置づけるのかということに不安や迷いを持つ教職員は多いのです。「情報モラル」とどう違うのか。また、パソコンを使って授業するICT教育が強化され、操作スキルの方に時間がとられ、むしろメディア・リテラシー教育という概念やその本質部分に関しての理解は薄れているようにも思います。

そんな中でも工夫を凝らして実践を行っている学校もたくさんあります。たとえば、小学校高学年で校区内のケーブルテレビ局を見学、取材して、「番組製作上、大切にしていることは何か」を考えさせ、読み解きだけでなく、提供する側に責任が生じていることなども教えています。

価値が厳しくなっています。その上で、「子どもにも情報リテラシーを身につけさせたい」は全体の74%と、リテラシーへの保護者の関心の高さがうかがえます。(グラフ1)

高橋 そうした世の中のニーズを受けて、2007年に総務省の助成事業で、小学六年生の総合的な学習の時間で使うことを想定してメディア・リテラシーの教材を製作しました。その際、今の学校現場ではとりくむことが多すぎて、学習指導要領に項目のないテーマだと、後回しになる傾向が強いという事情を聞きました。



※ メディアを批判的に読み解く力と創造的にメディアをつくりだす力の両方を育てる教育のこと。